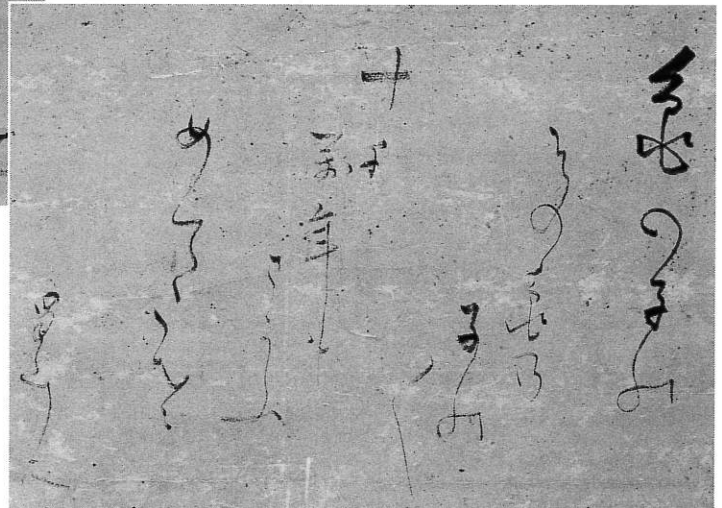
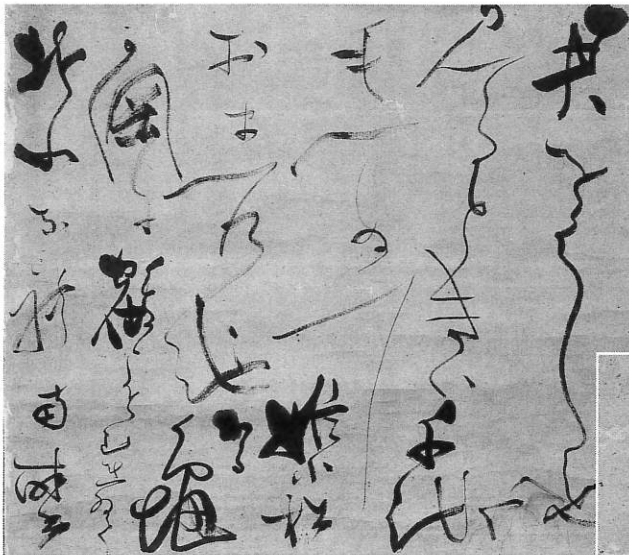


しいのき



崩しの美学

名誉館長 三 隅 治 雄

銀杏くずしや島田くずし、また、木遣りくずしや浄瑠璃くずしなど、「崩し」と名付ける髪型や歌曲があります。既定の形を崩して、簡略化したり、別な要素を混ぜたり、文様や調子を変えたりして破格の美を創り出すものです。楷書を行書にし、行書を草書にする「崩し字」はその典型で、格式だの範例だのといったものを壊して、平俗で斬新、洒脱なものを創ろうとの心意気が見えます。

江戸後期の文人大田南畝^{おおた なんぼ}（1749～1823）はその崩しの達人で、短歌・漢詩・小説などを機知と諧謔^{かいぎやく}で好き放題に崩し、狂歌・狂詩・洒落本などの戯文学世界を拓きました。

現在、館所蔵の揮毫^{きごう}二点（上写真）を見ると同一人物の筆と思えぬほど変わっていますが、かれは、作品ごとに四方赤良・蜀山人などの仮号を変えた人物。崩しの精神が躍如と見えます。

文化財よもやま話

中野の講

当館では、4月18日(火)から5月20日(土)まで企画展「中野の講」を開催いたします。

「講」とは何か。疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが。広辞苑をひもときますと、「神仏を祭り、または参詣するために組織する団体」とあります。このような信仰をとにもする講の他に、頼母子講など経済的な講もあります。

中野には神仏を祭り、参詣するための講がいくつもありました。その一つが富士山に登山、参拝する富士講です。鷲宮、松が丘、江古田、上高田あたりから新宿区落合あたりまで多くの講員がいました。江戸時代には活動を始めていたといわれ、昭和50年頃まで続いていました。富士講は、妙正寺川などで身を清めてから、白装束に身を固め、富士山に登り祈願しました。

このほか神奈川県伊勢原市の大山阿夫利神社に参拝する大山講や埼玉県秩父郡の三峰神社に参拝する三峰講など様々な講がありました。武州御岳山に参拝する御嶽講や群馬県の榛名神社に参拝する榛名講は現在でも区内で行われています。また、どこかの山に登るということはありませんが、観音菩薩を拝む観音講も行われています。

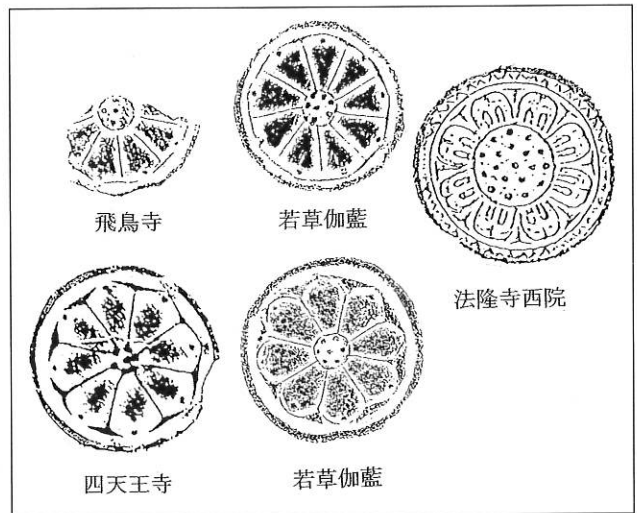
今回の企画展では、富士講資料をはじめ、御嶽講や観音講など講に関する資料を展示します。参拝の際に使用された衣装など貴重な資料の数々をお楽しみください。

ところで企画展を開催するにあたり、中野区内の講に関する写真を募集しております。当館で保存している資料だけでなく写真なども展示して、講の活動の様子を紹介できればと考えております。講に関する写真をお持ちの方、情報をお寄せいただけないでしょうか。展示等で活用させていただきたいと思います。また、講以外にも、昭和40年(1965)頃までのお正月や七夕などの年中行事の写真も募集しております。特に雛人形や五月人形を飾っている様子の分かる写真があれば幸いです。よろしく願い申し上げます。

大地に眠る歴史

昔の人は遺跡をどう見たか(13)

今回で法隆寺再建非再建論争のお話は最終回になります。寺院跡から出土する遺物の代表は瓦です。若草伽藍で用いられていた瓦の文様は単弁八葉蓮華文という四天王寺とまったく同じもので、しかも日本最古の寺院である飛鳥寺の瓦と同じ型で作られているのです。つまり三つのお寺の瓦は同じ時代、6世紀末から7世紀初頭のものとなります。これに対して法隆寺西院(現在の法隆寺)から出土した瓦は、複弁八葉蓮華文で蓮の花びらが二つに分かれている形をしています。この文様は天智朝から天武朝の頃(7世紀中～後半)に創建された川原寺の瓦に見られるもので、法隆寺西院のものはこれより変化が進んでいるため新しいことが確実です。これらのことから若草伽藍の方



が法隆寺西院より先に建てられたことが明らかにされました。したがって、現在の法隆寺は「日本書紀」の記録のとおり落雷で焼失した後に、北西側に場所を移して再建されたことが定説になったのです。平成16年の発掘調査で若草伽藍の西側から焼けた壁画の破片や瓦が発見され、火災を受けた様子が明らかにされています。ところが、同じ平成16年に、西院金堂の柱材が年輪年代法による測定で焼失よりも前の西暦668～669年頃に伐採されたという結論が出て新たな謎が提出されました。

法隆寺論争は明治・大正・昭和での決着を越えて平成まで続くことになったのです。今後どう展開していくのか注目していきましょう。

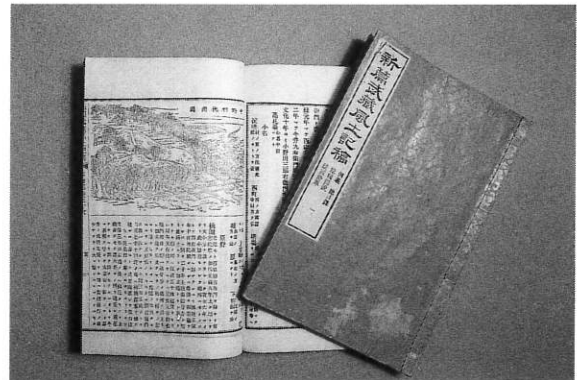
温故知新の手引き

長引く経済不況ですが、それゆえ心の憩いが求められる時代になっています。京都、奈良や鎌倉などの古都、世界遺産の白川郷・山のひなびた温泉などに日本の原風景を求める人々が盛んに訪れています。このような中で、近年、観光地の歴史文化ばかりでなく、住んでいる土地や出身地の歴史、つまり郷土の歴史に興味を持たれる方が増えています。資料館にもそういった方々が調べ物に来館されています。そこで今回は、中野をはじめとした東京・武蔵野など周辺地域の郷土史を探る上で、最も基本となる手引き書をご紹介します。

郷土史を研究する手始めとしては、その時代の様子がわかる、できるだけ古い記録で網羅的に編纂されているものを座右の参考書として使うことです。いきなり、古文書などは読めるものではありませんし、また、断片的な内容ですので全体的なことはつかめません。その点で、書店や図書館でも扱われ、読み易く、しかも広い範囲にわたって記述されている書物が大変有用になるのです。

基本バイブル「しんべんむさしふ ど き こ う新編武蔵風土記稿」

この書は江戸幕府が編纂した武蔵国（現在の埼玉・東京・川崎・横浜）の地誌です。地誌とは、ある地域の地名・位置・地形・気候・集落・交通・産物・風俗・習慣・伝承・歴史などを記したもので、古くは奈良時代の風土記に始まります。その後、私的な編纂、藩による編纂など小さな地域のものを作られていますが、意外にも国家的規模で網羅的なものは奈良時代以来、この新編武蔵風土記稿が最初のものと言えます。その編纂は、文化



内務省地理局 明治17年刊行版 館蔵

7年（1810）に大学頭林述斎が幕府に建議したことから始まります。昌平坂学問所が編集機関となり、林述斎が総裁、幕臣間宮士信らまみやことぶを責任者として42名のスタッフによって作成されました。

構成は、本編265巻、付録2巻の大部なもので8巻までは武蔵国全体の歴史、代表的な名所、主な河川、武蔵にちなむ和歌・漢詩などを紹介し、9巻から265巻までが、豊島郡・葛飾郡・荏原郡・橘樹郡・久良岐郡・都筑郡・多磨郡・新座郡・足立郡・入間郡・高麗郡・比企郡・横見郡・埼玉郡・大里郡・男衾郡・幡羅郡・榛澤郡・那賀郡・児玉郡・賀美郡・秩父郡の順で各地域について記されています。

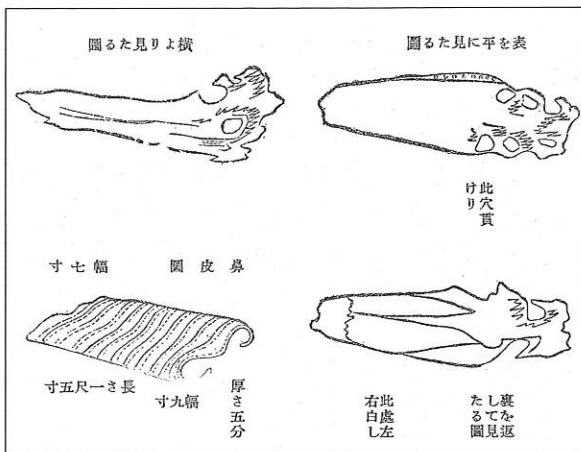
資料の収集にあたっては調方・調人・取調といったスタッフが現地に赴き、各村から資料の提出を求め、必要に応じて聞き書き、スケッチなどをして進めました。特に、広大な面積と山岳地帯も含まれていた多磨郡・秩父郡・高麗郡については、八王子千人同心の中から原胤敦たねあつ以下11名が取調になりました。彼らはこの広大な地域の調査員となったのです。八王子千人同心とは、武田の遺臣等を取り立て、武蔵の西側の防備のために八王子に配置されたものです。彼

らが取調を任命されたのは、この三郡の地理を熟知していることと、八王子が多磨郡に位置し地の利が最適だからということがあったと考えられます。

中野区域も彼らが担当して詳細な調査が開かれています。

そして文政11年（1828）に完成、清書を経て天保元年（1830）に幕府に献上されました。あしかけ20年に及ぶ大事業だったのです。

中野区に関するものは、123巻に新井村・上沼袋村・枝郷大場村・下沼袋村・枝郷新橋村・上鷲ノ宮村・下鷲ノ宮村、124巻に江古田村・片山村・上高田村・中野村・本郷村・本郷新田・雑色村の順に記されています。挿絵は桃園の様子・龍骨（井の頭池で退治された龍の骨といわれているもの。宝仙寺にありましたが戦災で焼失したと伝えられます）・象骨・象牙（享保年間に将軍に献上され、後に中野に下げ渡されて飼われた象の骨と牙、宝仙寺に残されていましたが戦災で焼失しました。）が見られます。

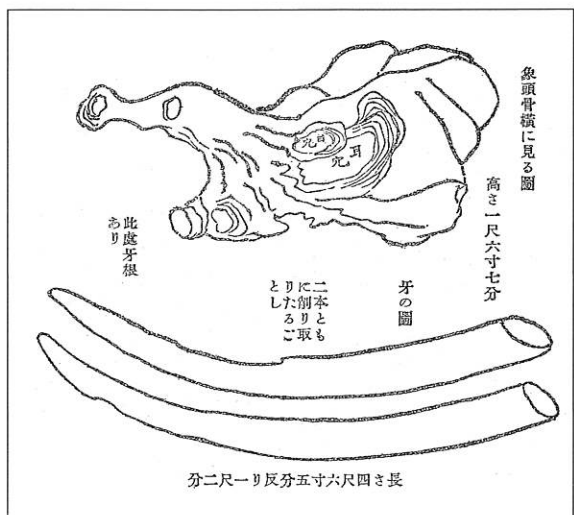


それでは、おおよそどんな内容が書かれているのか、資料館の所在する江古田村を例にとってみましょう。まず、日本橋からの距離、村の歴史、広さ、水田の位置、民家の数、土質と交通路、検地の年、現在の領主までを記載しています。その後高札場の場所、小字名とその場所、水利（仙川用水）の解説、神社（氷川社・金峰社・神明社・大六天社）の場所と社殿の大きさ、寺院（東福寺・蓮華寺）の場所・縁起・本堂・本尊の大きさ、旧跡（江古田原沼袋古戦場）の解説となっています。

村の基本的な情報はすべて網羅されており、19世紀初頭の江古田村の有様を具体的に想像することができます。

このような、有用な書物ですが、献上後は幕府の文書館である紅葉山文庫に収められ一般の人々に流布することはありませんでした。

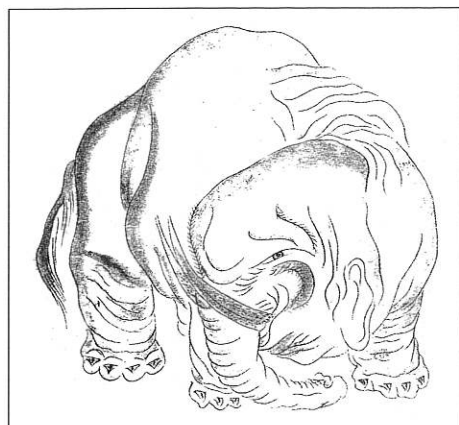
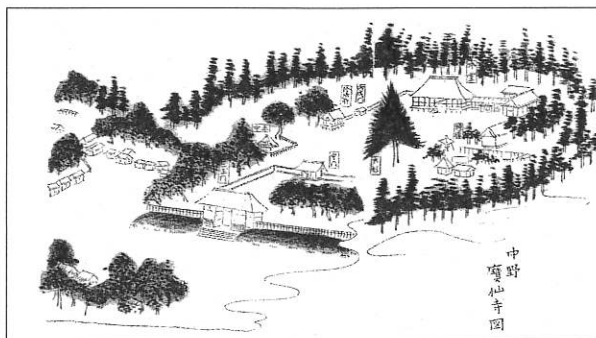
この大著の重要性を認めた明治政府は出版を企画して、内務省地理局から明治17年（1884）にはじめて世に出されました。完成後54年も後のことでした。



※ 雄山閣1981『大日本地誌体系（七）新編武蔵風土記稿』全12巻

むさしめいしょうずえ
 武蔵野・多摩ならこの一冊「武蔵名勝図会」

「新編武蔵風土記稿」の編纂に携わったスタッフの手許には、膨大な資料が蓄積されていました。彼らの中には風土記稿編纂とは別に自ら地誌を執筆しようとした人々がいました。植田孟縉^{うえだもうしん}もその一人で「武蔵名勝図会」を著しています。植田は宝暦7年（1757）に三河吉田藩士の子として江戸に生まれ19歳のときに八王子千人同心植田家の養子となりました。57歳の時に風土記稿の編纂スタッフの一人に加えられ、本格的な郷土史調査を開始します。その後「武蔵名勝図会」「日光山志」などを執筆して天保14年（1843）に87歳で没しました。また、渡辺華山に師事して画業を修めており、名勝図会の挿絵は植田自身の手によるものです。この書は文政3年（1820）には完成されており、彼らが編纂していた風土記稿の多磨郡の完成より2年前になります。植田の並々ならぬ情熱が伝わってきます。



また、この書は当初は武蔵国全体に渡る予定であったものと考えられますが多磨郡12巻を以って筆を止めたことについては、江戸名所図会の編纂が進行していることを知ったためと言われていています。内容的に重なる部分が多いことと、江戸名所図会が先に着手されていたことに敬意を表したことが理由と考えられています。

内容は、新編武蔵風土記稿と比較すると、歴史・伝承や説話的な内容に重点をおいて、地理的な記述や検地・領主などの行政的な記載を少なくし、すべての村を網羅するものではなく、植田が興味をもったものを項目として取り上げているところが異なっています。

中野に関連する項目は、中野（古戦場・小淀橋・犬小屋跡・象部屋跡・桃園・御茶屋・大名山・御茶屋跡・一本松・一本檜・古街道・氷川神社・宝仙寺）、本郷村（成願寺）、雑色村（多田権現・十貫坂・御立場）、新井薬師、沼袋村、江古田村（古戦場・石神井街道）、鷺の宮八幡、城山があがっています。挿絵には、中野村遠景・桃園・象・象骨・象牙・竜骨・宝仙寺が描かれています。

※ 慶友社1975『武蔵名所図会』全1巻



えどめいしょずえ
挿絵が秀逸「江戸名所図会」

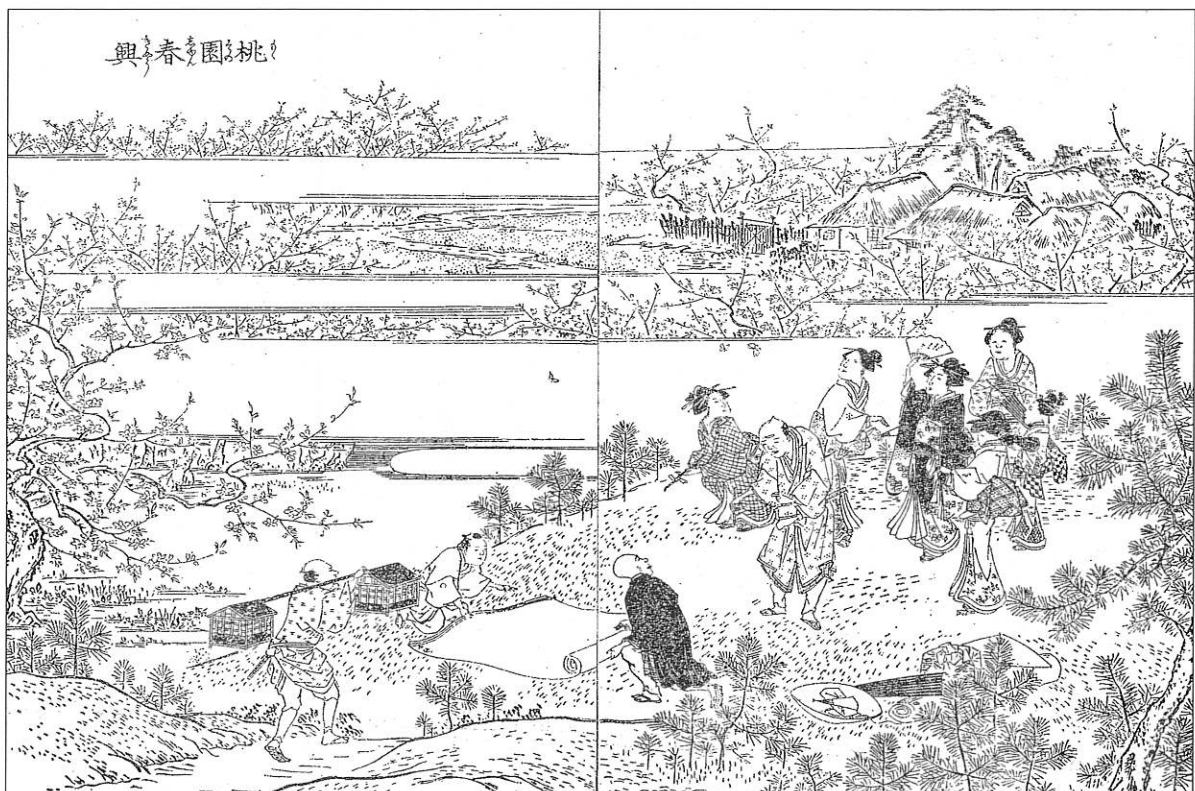
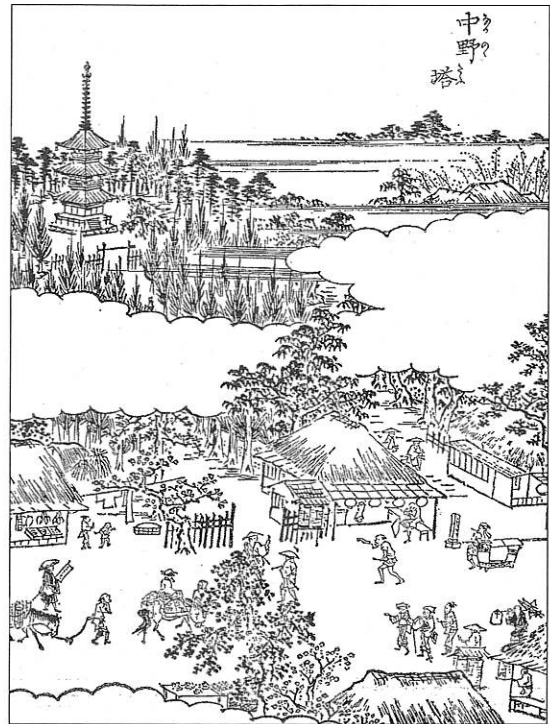
江戸名所図会は神田雉子町の町名主齋藤幸雄・幸孝・幸成（月岑）の父子三代に渡って編纂された大著で7巻20冊の構成です。幸雄によって寛政年間（1789～1801）に実地調査が開始され、幸孝によって校訂と追加調査が重ねられ、幸成が祖父・父の遺稿を編集して天保7年（1836）に完成しました。35年間以上かかった苦心の著作です。

江戸名所図会の最大の特長は実地調査から得た詳細な記述もさることながら、同行して膨大なスケッチを描いた長谷川雪旦による挿絵が秀逸という点にもあります。

長谷川雪旦（1778～1843）は、はじめ江戸下谷の彫物大工でしたが長谷川等伯に私淑して画家に転じました。東都歳時記と江戸名所図会は雪旦の名を高らしめた代表作です。

本書の構成は、巻之一で麴町から高輪、二で品川から六浦（横浜市）まで、三で奥沢・多摩川丸子方面、四谷から国分寺・多摩の横山（八王子市）、四で市ヶ谷から中野・小金井、落合・練馬・狭山・所沢、浦和・大宮方面、五で湯島聖堂から根津・赤羽・川口まで、六で浅草から西新井、七で州崎・木場から船橋・行徳までと、現在の東京都・埼玉県南部・千葉県東部・川崎市・横浜市にわたる範囲について名所・旧跡を紹介しています。そのうち中野に関連するものとしては淀橋・成願寺・中野長者の墓・中野・中野七塔・宝仙寺・桃園が採り上げられ、挿絵は淀橋水車・成願寺・中野塔・宝仙寺・桃園が描かれています。

※ 角川書店1975『新版江戸名所図会』全3巻



古文書つづり

ナマが一番よくわかる

最初から私事で恐縮ですが、分不相応な高品質スピーカーを使っています。しかし楽器による細かな音色の違いを聞き分けられず、私は耳が悪いのかと落胆しておりました。ところが過日、ある弦楽器作家の楽器を集めた演奏会（12挺の合計評価額約90億円！）と、ヴァイオリンとアコーディオンによる演奏会に行ったところ、「同じヴァイオリンでも楽器によってこんなに音色が異なるのか」と自分でも驚くほど簡単に違いを聞き分けられました。悪かったのは私の耳でなく、オーディオの使いこなし方であると判明した次第です。

このように、媒体を通した複製より原物の方がはるかに多くの情報を含んでおり、その差は例え専門家でなくともしばしば感じられるものです。

所蔵者でもない限り、古文書を見るのは写真かコピーがほとんどでしょう。ただ写真ではどうしても濃淡が見づらくなりますし、最近では高性能と

はいえコピーだと墨なのか汚れなのか虫害の跡なのか判別が難しくなります。汚損や虫損の激しいもの、あるいはコピーでは消えてしまう朱書の多いものなど、原物を見ないとどうにも読めない場合は少なくありません。実際、古文書解読ボランティアの方と知恵を出し合っても読めずにいた写真版の古文書が、そのうちのお一人が所蔵先で原物を見た途端に読めた例もあり、「一番読みやすいのはナマの文書」という意見を裏付けました。

とつづりにくい印象のある古文書ですが、原物は意外と敷居の低いものです。展示などで出品してある折に一度体験されてはいかがでしょうか。



▲汚損・虫損・裏書き…と、三拍子そろった例。だが原物に白紙をはさめば割と簡単に読める。

中野往来

梅照院本堂再営供養塔

新井5-3-5 梅照院境内

新井薬師として親しまれている梅照院は、天正14年（1586）僧行春によって開かれたといわれています。五代目住職玄鏡の夢に薬師如来が現れ、小児用の妙薬を授かりました。この薬は「夢想丸」と名付けられ、とてもよく効くと評判になり、子育て薬師と呼ばれるようになりました。また、徳川二代将軍秀忠の姫君が眼病にかかったとき、祈願し治癒したことから、治眼薬師としても有名です。

梅照院は長い歴史の中で、幾度か火災に遭い、そのたび復興されて、現在に続いています。そんな歴史を伝える貴重な資料に安永8年（1779）に高野山延命院の引導地藏尊を模して建立された本堂再営供養塔があります。

碑文によると、「子育て薬師として人々に知られた梅照院は、延享元年（1744）に高僧運樹が移住してからさらに栄え、お礼参りの人が絶えな

かった。明和元年（1764）に火災で建物が焼失した折、運樹はすぐに仮仏殿を造り、さらに本堂再建の大願をたて、趣意書を示して広く喜捨を募った。しかし本堂の建立を待たず、75歳で没した。後を継いだ英俊は十年以上も苦勞の末、安永8年（1779）本堂の落成に至った。落成の仏席を開き人々の信仰心に応えた。薬師仏の誓願は仏と同じ心になることによって慈悲がある。現世は病気を取り除き心身安楽の恵みを受け、将来は、苦しみから離れ極楽浄土へ導かれ、世が清らかに治まる。道義高まり四恩にこたえ自他の利益となる。」とあります。



事業報告

各種事業経過

2005年10月～2006年3月

事業名	内 容	期 間
企 画 展	「井上円了の民具コレクション—妖怪学の源流をたずねて」 「おひなさま展」	10/4～11/27 2/4～3/5
所蔵名品展	「旧家の佳品—江古田村名主家に伝わる茶道具・工芸品」 「単色の語りべ—旧名主家の古文書と江戸時代の書籍」	10/4～11/27 1/17～3/31
ミ ニ 展	「酉の市」 「お正月」	11/5～11/30 12/16～1/14
公 開 事 業	秋季「山崎家茶室書院公開」 冬季「山崎家茶室書院公開」	10/1～11/30 2/4～3/5
青少年講座	「木彫り工作」 講師：藤本英以氏（木彫り人形作家）	11/19
古文書講座	講師：大友一雄氏（国文学研究資料館教授） 講師：笠原 綾氏（日本放送協会学園専任講師）	10/8・15 10/22
史跡めぐり	「哲学堂公園をたずねる」 講師：羽木志野（当館主任専門研究員）	11/5
埋蔵文化財 対 応	江古田二丁目13番民有地立会調査 弥生町三丁目27番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 弥生町三丁目34番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 南台一丁目5番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 中野六丁目17番民有地試掘調査（国庫補助金対象事業） 松が丘二丁目21番民有地立会調査 弥生町六丁目8番民有地立会調査 松が丘二丁目14番民有地試掘調査 江原町二丁目22番民有地立会調査 白鷺二丁目37番民有地立会調査 弥生町四丁目1番民有地立会調査 江原町二丁目16番民有地立会調査 野方三丁目7番民有地立会調査 松が丘二丁目21番民有地試掘調査2件（国庫補助金対象事業）	10/1 10/2 10/5 10/7 10/15 10/17 11/5 11/18 11/25・30 12/2・7・22 12/22 2/21 3/7 3/8
そ の 他	早春昭和なつメロ鑑賞会 ミニ雛飾り作り教室 小学校3・4学年総合学習見学24校	2/10・17・24・3/10 2/16・23・3/2 10月～2月

寄贈資料一覧

2004年10月～2005年3月

敬称略受入順

資 料 名	点数	氏 名
写真集『獅子の詩』	1	峰岸三喜蔵
ラジオ体操記念旗	2	小島義三郎
関東大震災イラスト集ほか	7	武山正雄

文学者書簡・葉書	一式	藤井とき江
洗濯機・冷蔵庫ほか	13	中野清掃事務所
富山薬箱・マントほか	一式	岩田喜美子
市松人形・五人囃子	一式	齋藤房枝
紙製おひなさま	一式	西村 清
大工道具・棹はかりほか	一式	佐藤 慎

◎貴重な資料をありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

入館状況

2005年10月～2006年2月（延べ117日間）（人）

一 般	団 体	学校教育	合 計
10,364	56	2,107	12,527

発行年月日 2006年4月1日

編集・発行  山崎記念
中野区立歴史民俗資料館

〒165-0022 東京都中野区江古田4-3-4

☎ 03 (3319) 9221 FAX 03 (3319) 9119